10月

美園小だより

令和8年9月30日
さいたま市立美園小学校
第197号 児童数1035名
Tel 048(812)6611
Fax 048(878)6660

読書のススメ

校　長　　河　野　秀　樹



今年１月に実施した、令和７年度さいたま市学習状況調査の児童質問紙「読書が好きですか」において、現在の２年生以上の学年の平均は、残念ながらさいたま市の平均より低かったです。しかし、今年の６月の貸出冊数は、昨年度に比べて1,000冊以上も多くなりました。10月28日（水）～11月30日（月）は、本校の読書週間です。

さいたま市の中央図書館に行くと、来年生誕120年を迎えるさいたま市出身の児童文学作家 石井桃子さんの関連図書などが展示されています。石井さんは著書の中で、自宅のまわりについて絵や文で表しています。「私たちの家の前は、旧中仙道になっていて、家から三百メートルほど上ると―そのころ、中仙道沿いでは、東京の方を下、遠まわりしても、京都へゆくほうを上とよんでいた―東北や信越方面へゆく鉄道の大きな踏切があった」と。また、最初の読書の記憶は、姉の膝の上で読んだ「舌切りスズメ」で、愛しているものたちが、無理解なもののために離別しなければならなかったことに胸が潰れる思いで泣いてしまったそうです。

石井さんが日本語に訳した「ピーターラビット」や「くまのプーさん」は、今でもとても人気があります。ある時、石井さんは知り合いの子どもから「英語で書かれた『プー横丁にたった家』という童話を読んでほしい」と頼まれました。短い文や詩などを使って書かれているので、英語をそのまま日本語に訳しただけでは、意味が分からないと思った石井さんは、本が作られた理由や本に描かれている絵をもとに想像を膨らませました。そして、石井さんは登場する動物に合わせて名前を工夫したり、プーの台詞を「ぼくが一番していたいのは、何もしないことさ。ただブラブラ歩きながらね。聞こえないことを聞いたり、何も心配しないことさ」というように、話し方や文の最後を変えたりして、心を込めて読んであげました。すると子どもたちの瞳は輝き始めました。この時の感動が、翻訳家、児童文学作品をつくっていく活動へと繋がったそうです。

石井さんは、著書の中で「子どもたちには、ぜひ本を読んでもらいたい」また、「子どもというのは、いつの時代でも、生来の好奇心や想像力を働かせて、一歩一歩、自分のまわりの現実を確かめながら、経験をたくわえ、その途中で考える力や、判断力を養い、やがておとなになってゆきます。これからの世の中に対処してゆくには持続して問題をつきつめる思考力、または抽象的な思考力が必要でしょう」と述べ、文字の力が大きいことも伝えています。子どもたちには、パソコンや映像だけでなく、地域や学校の図書館、本屋などで選んだ本をたくさん読んでほしいです。

参考図書：「幼ものがたり」石井桃子　福音館文庫、「新しいおとな」石井桃子　河出書房新社、「石井桃子in浦和」石井桃子の会　等